

# T A G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## 縄文人が太平洋を渡った

### メガーズ博士滞日十日間の軌跡

アメリカ、スミソニアン博物館の研究者ベティ・J・メガーズ博士（74歳、文化人類学）は、十月二十六日来日、二十九日には、ジョン万次郎の故郷である土佐清水市の「足摺巨石文化シンポジウム実行委員会」の招きで、現地のシンポジウムに参加され、ついで十月三十一日には、発掘が進む青森県三内丸山遺跡を視察、二日には東京永田町の憲政記念館において公開講演、続く三日には東京で日本側の各専門学者と学際的討論会に臨み、翌十一月四日、日本側の厚遇に感謝しながら帰国の途につかれた。今その精力的な足跡を、回顧してみる。



メガーズ博士、11月3日の討論会で

#### 黒潮の洗う岬で

土佐清水市では、到着直ちに一帯の巨石文化構築物を視察しながら、同地出土と伝えられる土器の断片を凝視される。翌二十九日午後からは、足摺巨石文化シンポジウム（実行委員長畑山昌弘氏）に臨まれ、博士が一九六〇年代の前半、亡き夫エバンズ氏とともに、南米エクアドルのバルデビア遺跡から出土した土器片が、日本の縄文式土器によく似ていることに着目、来日して調査を重ねた結果、九州曾畑遺跡その他の土器とよく対比されることを見い出

された。ここで対比スライドを十例以上映写説明、これが「新大陸」で独自に生まれ発展した形跡が認められないことから、縄文土器の伝播であることを立論された。その経過を順を追って丁寧説明されたのが講演の主題であった。

続いて古田武彦氏は、メガーズ博士が、日本到着以来、直ちに、コロンビアの新しい遺跡から出土した土器が中部関東の縄文中期の土器と類似するのではないか、などと目を輝かせて興味を集中されていることなど、博士の若々しい学問的情熱に感銘する言葉が述べられたのち、持説の「魏志倭人伝」中の侏儒国を足摺に比定し、そこから船行一年の裸国・黒蘭国を南米西海岸とする論拠の説明があった。さらに、アメリカと日本と、別々に提起された説の結論が一致することの意義についても強調された。

続く、京都造形大学の渡辺豊和教授は、自ら建築史家としての芸術的見地からの意見であることをことわったのち、足摺の巨石は自然をベースにした構造物として世界最大規模のものだと判断される。縄文人は現代からは想像できないくらい直感力に優れ、夢を見る力が備わった人たちであり、その力を応用して、巨石構